



# おにぎり通信

2017年5月13日(土曜) 四ツ谷おにぎり仲間

こんにちは！私(わたし)たちは毎週(まいしゅうどようび)土曜日(どようび)に、銀座(ぎんざ)・日比谷公園(ひびやこうえん)、東京駅(とうきょうえき)周辺(しゅうへん)で生活(せいかつ)されている方々(かたがた)を訪問(ほうもん)しているボランティアグループです。

明日(あす)は、母(はは)の日(ひ)です。母(はは)の日(ひ)は5月(がつ)の第2日曜日(だい にちようび)にアメリカ(あめりか)のアンナ(anna)という女性(じよせい)が亡(な)き母(はは)を思(おも)い教会(きょうかい)でカーネーション(カーネーション)を配(くば)ったこと(こと)から、お母(お)さん(さん)に感謝(かんしゃ)を伝(つた)える日(ひ)として世界(せかい)中に広(ひろ)まったそう(そう)です。

童謡(どうよう)や演歌(えんか)などの歌(うた)にもた(た)くさん(さん)の母(はは)をテーマ(テーマ)としたもの(もの)があります(あります)。その数(かず)はと(と)ても多(お)く、このこと(こと)は、それぞ(それぞ)れの人(ひと)にそれぞ(それぞ)れの母(はは)への思(おも)いがあること(こと)の現(あらわ)れな(な)のではないで(ない)しょうか(しょうか)。

☆5月(がつ)1日(いち) (月) (げつ)の福祉(ふくし)行(こう)動(どう)報(ほう)告(こく) どなた(なた)もお見(み)えに(に)なれ(な)ませ(ませ)ん(んで)した(した)。

次(じ)回(かい)の福祉(ふくし)行(こう)動(どう)：5月(がつ)15日(じゅうご) (月) (げつ)

朝(あさ)8時(じ)30分(ぶん)ま(ま)で(で)に東京(とうきょう)駅(えき)丸(まる)の内(うち)南(みなみ)口(ぐち)地(ち)下(か)に集(しゅう)合(ごう)して(して)くだ(くだ)さい(さい)。(※集(しゅう)合(ごう)場(ば)所(じょ)が北(きた)口(ぐち)から南(みなみ)口(ぐち)にへんこう(変更)になりました(なりました)。ご注(ちゅう)意(い)くだ(くだ)さい。)蒸(じょう)気(き)機(き)関(かん)車(しゃ)の車(くるま)輪(りん)が展(てん)示(じ)してある前(まえ)に「おにぎり通信(つうしん)」を(も)持(も)った者(もの)が待(たい)機(き)して(して)います(います)ので、声(こゑ)をおか(お)かけ(かけ)くだ(くだ)さい(さい)。

病(びょう)院(いん)に行(い)きたい方(かた)や、体(からだ)を休(やす)めたい方(かた)と一(いっ)っ(っ)しょ(しょ)に希(き)望(ぼう)の福祉(ふくし)事(じ)務(む)所(じょ)ま(ま)で、ボラ(ボラ)ン(ン)ティア(ティア)が同(どう)行(こう)いた(いた)し(し)ます(ます)。福祉(ふくし)行(こう)動(どう)は原(げん)則(そく)として毎(まい)週(しゅう)月(げつ)曜(よう)日(にち)に行(い)います(います)(月(げつ)曜(よう)日(にち)が祝(しゅく)日(にち)のとき(とき)は火(か)曜(よう)日(にち))。福祉(ふくし)行(こう)動(どう)は参(さん)加(か)さ(さ)れるそれぞ(それぞ)れの方(かた)が、ご自(じ)身(しん)の希(き)望(ぼう)を(を)ご自(じ)身(しん)の言(こと)ば(ば)でハッ(ハッ)キリ(キリ)と伝(つた)えること(こと)によ(よ)り成(な)り立(た)ち(ち)ます(ます)。

## 最(も)寄(よ)りの福祉(ふくし)事(じ)務(む)所(じょ)

中(ちゅう)央(おう)区(く)福(ふく)祉(し)事(じ)務(む)所(じょ)・・・中(ちゅう)央(おう)区(く)築(つき)地(ち) 1-1-1 中(ちゅう)央(おう)区(く)役(やく)所(じょ)4階(かい)

千(ち)代(よ)田(だ)区(く)福(ふく)祉(し)事(じ)務(む)所(じょ)・・・千(ち)代(よ)田(だ)区(く)九(く)段(だん)南(みなみ) 1-2-1 3階(かい)

<「国際児」の母、澤田美喜>

みなさんは、澤田美喜という人をご存知でしょうか？

澤田美喜は第二次世界大戦の敗戦により、アメリカ人兵士と日本人女性の間に誕生した「混血児」救済を私財を投げ行った人物です。戦争直後の日本では肌の色が黒色系や白系の生後間もない幼子が「棄てられる」という事件が多発しました。

この窮状を見るに見かねて、こうした子どもたちの<母>となり、これらの子どもたちのための<家>である、エリザベス・サンダース・ホームをつくったのが、澤田美喜です。彼女は、子どもたちから「ママちゃま」と呼ばれ、2000人以上と言われる子どもたちがこのホームから世界中に巣立っていきました。

このように書くと、彼女の仕事が順風満帆だったように思えてしまいますが、実際のところは、明日の子どもたちの食べ物がない、職員の給料が払えないといった危機は幾度も幾度もありました。また、ホームの乗取りが企てられたり、GHQに目をつけられ、事業が妨害されたりと、困難続きだったのが彼女のホームをはじめてからの人生でした。彼女は著書のなかで、「母たることは地獄のごとし・・・」という言葉を残しています。そのような困難続きの彼女の後半生でしたが、彼女が亡くなって37年経った今でも、一部卒業生たちによって、母の日はホームに集まるという習慣が続いています。

卒業生は、かつて「混血児」と呼ばれ、差別を受けてきましたが、彼女の「前を向いて歩きなさい、誇りをもって生きなさい」という教えを受け、差別をはねのけ自らの人生を歩み、一期生は70歳を超えました。

エリザベス・サンダース・ホームは血縁ではない、異なった「家族」の形を示してくれました。家族や母といった存在は、血縁だけによらず、何かしらの結びつきでもうまれうるものなのかもしれません。

おにぎりを包んでいるラップや読み終わった通信は放置せずに、ゴミ箱に入れるなどして片付けにご協力をお願いいたします。

おにぎりはかならずその日のうちにお召し上がり下さい。

受け取るのは、1人1個でお願いいたします。

よつや なかま れんらくさき  
四ツ谷おにぎり仲間 連絡先: 080-7795-8535